



K A P P A N O V E L S

長編推理小説

スーパーゴリラ

必殺! 誘拐防衛機関の一匹狼

小林久三

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。あら、ありがたく存じます。なお、このほかに、「カップの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。また、今後、どんな本をお読みになりたいでしょうか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編推理小説 スーパーゴリラ

昭和 57 年 3 月 5 日 初版 1 刷発行

定価 680 円

著 者 こ ばやし きゆう ぞう
小 林 久 三
川崎市多摩区王禅寺 680-126

発行者 大 坪 昌 夫

印刷者 鈴 木 貞 三 郎
東京都文京区水道 1-2-1
公和印刷

発行所

東京都文京区音羽 2
振替 東京 6-115347

株式会社 光 文 社
電話 東京 (942) 2 2 4 1 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。 (榎本製本)

表紙の模様・意匠登録 116613 © Kyūzō Kobayasi 1982

(分)0-2-93(製)02461(出)2271(0)

Printed in Japan

長編推理小説

スーパーゴリラ

必殺！ 誘拐防衛機関の一匹狼

こばやしきゅうぞう

小林久三



カッパ・ノベルス

スーパーゴリラ 目次

第一章	闇 やみ の狙撃 そげき	5
第二章	十六億円の肉体	18
第三章	身代金 みのしろぎん 受取り犯射殺	51
第四章	二重誘拐	74
第五章	黒い菊	96
第六章	人肉セリ市場	118
第七章	TOKYO行き貨物便	141
第八章	狂った人質	164
第九章	真昼 わな の罠	186
第十章	幻影の絞首台	209
第十一章	火の祭典	232
第十二章	三十三億円の罠	255

イラストレーション

辰巳四郎

第一章 闇の狙撃

1

バックミラーをのぞいた堀江の顔が、不意に変わった。
「訝しいな。あの車」

堀江が独り言のように呟いた。「空港から、ずっと尾いてくる」

その声を、後部座席の柳川圭子がきき答めた。

「どうかしたの」

「いや」

「そう」

圭子は波打つ髪を片手で意味ありげに押えると、堀江

の顔をちらとみた。飼い主が、飼い犬をみるような目だった。

堀江は正面を向くと、改めてバックミラーに映る車の影をみた。灰色の車が、少し遅れてついてくる。

あの車は、モンブラン通りあたりから、背後にぴたっとついてきたと、堀江はおもった。モンブラン橋を渡り切って、左に折れ、レマン湖ぞいに走りはじめてからも、執拗にあとを追ってくる。

へ尾行しているのだろうか、あの車は」

胸に疑惑の影が射した。

堀江は試みに、車のスピードをあげた。

左手に、とりはじめた灯火に透けた大噴水のしぶきがみえた。それは、黒い木立ちのうずくまる湖ぞいの公園の奥にある大噴水だった。湖中から吹きあげる仕組みになっていて、噴きあげる水の高さは、百メートルから百五十メートルにも達する。

湖岸ぞいの道路を走っていると、宙を突き刺すようにのびた巨大な水の剣が、途中で折れ曲がって、車の屋根に落ちてくるような錯覚に見舞われる。

レマン湖につくられたこの公園は、イギリス庭園、

の名で親しまれている。大噴水と花時計で知られている、公園の入口には、十九世紀半ばに建てられた国家記念碑と、建国の英雄の群像がそびえ、旧市街にたったサン・ピエール寺院の青銅の尖塔とともに、ジュネーブの街のシンボルの存在になっている。

車窓に、噴水のしぶきが早い速度で流れた。

堀江の目に、それは濃い霧のようにしか映らなかった。意識の全領域を、背後から追尾してくるように見える灰色の車の存在が占めていた。

堀江は、さらに加速した。車体は、息を吹き返したように躍り出した。灰色の車は、しかし、こちらとスピードを合わせたようだった。二つの車は、依然として同じ距離を保っている。

そのことに、彼は不安を覚えた。灰色の車は、明らかにこちらを尾行している。

なぜ？

なんのために？

いずれにしろ、一刻も早く柳川圭子を別荘に送り届けなければと、堀江は自分にいいきかせた。柳川圭子は、社長の一人娘なのだ。途中、万一のことがあったら、大

変なことになる。社長秘書室員としての自分の将来に、決定的な傷がつく。

「急いでいるのね」

と、圭子がいった。

「社長が、あなたの帰りを首を長くして待っていますから」

「いいわよ、そんなに急がなくても」

声に、咎めるような調子が含まれてきた。

「もっと、ゆっくり走らせて」

「社長の命令なんですよ」

「パパは、待たせておけばいいのよ」

圭子是不機嫌な声を出した。

「しかし……社長と会うのは、一年ぶりでしょう」

「ゆっくり走らせて」

今度は、命令口調に変わった。

へわがままな娘だ」

堀江は、心中、毒づいた。これが社長の娘でなかったら、車外に放り出してやるところだ。自分の周囲に集まる人間をすべて、飼犬かなにかのように見下しながら、育ってきたに違いない。

バックミラーに映る圭子の顔を、針を含んだ目で眺め

た。長い髪。少し上向き加減の鼻と、よく動く目。すんなりとした長く、白い首。パリで、彫金の勉強をしているというが、パリの街を歩かせても、結構、ひとめを惹くかもしれない。

堀江の頭の記憶板に、コワントラン空港に降り立ったときの、柳川圭子の姿が映し出された。体の曲線がそのままみえるニットの服を着て、スウェードの靴をはいていた。スカートからのぞく形のいい脚から、一種、可憐なセックス・アピールが匂っていた。

パリに、堀江を迎えにいかせるという両親の言葉を無視して、ひとりでジュネーブまでやってきたのだ。それだけ外国の生活に慣れているといえるのだろうか、根は負けん気の強い、現代娘なのかもしれない。

ロンドンで行なわれた三星物産のヨーロッパ支社の会議に出席した父親と一年ぶりに、ジュネーブの別荘で会えるというのに、圭子のほうは、あまり嬉しそうな素振りを示さない。ジュネーブまで呼びよせられたことを、逆に迷惑がつている様子が、ありありと窺えた。

事実、空港に迎えに出た堀江の姿をみたとき、圭子は露骨に不愉快な態度を示した。

「パパの差し金ね」

そういったきり、車に乗っても、ほとんど口をきこうとしなかった。二十一歳になっても、子ども扱いされたことが癪にさわったのだろう。パリとジュネーブの間は、飛行機でわずか四十分の距離なのだ。彼女は、中学生の頃から、夏休みなどに、レマン湖の畔に建てられた別荘には、何度もきて、両親とともに滞在している。彼女にとって、国内の軽井沢の別荘にいくようなものなのだろう。それを、大袈裟に空港まで車で迎えにこられて、自尊心を傷つけられたに違いない。堀江は、そう解釈した。〈尾行者は、彼女の男性関係なのではないか〉

突然、そんな想念が閃いた。灰色の車の運転者は、パリから彼女を追ってきたのではないか。

「パリで男でもできたのかもしれない」

堀江は、改めてバックミラーの圭子の顔をのぞきこんだ。相手の男性は、日本人ではなく、フランス人なのかもしれない。

もしそうだとすれば、会長は狼狽するに違いないと考えて、堀江は唇の端を歪めた。三星物産といえば、日本最大の商社なのだ。その社長の一人娘が、青い目の男性

と結婚することになったら、大変な騒ぎになる。事は、三星物産にとどまるまい。財界のビッグ・ニュース、ある種のスキャンダルにまで発展するはずだ。当然、パリ支社長は、監督不行届きということで、社長の逆鱗にふれて、首がとぶ。

そんな目でみると、バックミラーに映る圭子の目に黒い焰ほのおのようなものが揺れているようにみえる。そういえば、社長がわざわざロンドンからジュネーブの別荘に立ち寄り、娘をパリから呼びよせた理由も、そのへんにあるのかもしれない。パリから飛んできた娘が、ひどく不機嫌で、なにかに苛立いらだっているようにみえるのも、父親が呼びよせた意志を悟っているためではないか。

車は、いつか、上り道に入っていた。

レマン湖が、眼下に沈みはじめた。

柳川正一郎の別荘は、レマン湖の東端の丘陵の一面に建てられている。背後を深い木立ちにつつまれ、前方の真下にレマン湖と、ジュネーブの市街地を見下ろせる一等地にあった。十年ほど前に、社長の私費で建てられたものだが、社長が滞在する期間をのぞいて、ヨーロッパ支社につとめる、三星社員の保養所としても使われてい

る。

九十九折りに蛇行した道にさしかかったとき、背後の灰色の車が急速に接近してくることに気づいた。灰色の車は、明らかに追い越しをかけ、こちらの車の前にまわりこもうとしているようだった。

そうはさせまいとして、堀江は蹴とばすようにクラッチを踏み、ギヤを手品ののように操作しながらカーブを回った。

灰色の車は、しかし、彼の車に追いつき、瞬間的な追い越しをかけた。

堀江は舌打ちして、つかのま、灰色の車の運転席に目をやった。

助手席で、こちらをみつめている男の姿をみたとき、

堀江は一瞬、目を疑った。助手席の窓には黒い小さな穴が貼りついていていた。

小さな穴は、こちらに向けられている。

へ銃口だ

そう悟ったとき、彼の額に冷たい汗が帯のように滲み出した。

へ奴らは、この車を狙^{ねら}っている」

堀江の唇が、奇妙な形に歪んだ。自衛本能で、叩^{たた}きつけるようにアクセルを蹴^けった。車は、凶暴な意志をもった獣のように飛び出した。

「気をつけてください！」

堀江は、後部座席に向かって叫んだ。

車は、灰色の車を背後に退けた。ガードレールが、一本の白い帯になった。

「あ」

背後で、圭子が悲鳴をあげた。彼女の頭がぐらつと揺れて、上体を叩きつけられるように座席に沈みこんだ。

堀江は、しばし、彼女のことなど念頭になかった。

灰色の車を引き離したとおもったのは、つかのまの錯覚に過ぎなかった。灰色の車は、腐臭を嗅^かぎつけたハイエナのように執拗^{しつ}につきまといてきた。

灰色の車は、みるみる堀江の車に迫いつき、並行して走ってきた。助手席の男の顔と、窓から突き出された拳

銃らしい銃口が、正確な遠近法で、彼の目に飛びこんできた。

助手席の男は外人だった。薄ら笑いを浮かべながら、あいた片手をふって、こちらに停止を命じている。

堀江は運転席に深く体をうずめ、さらに強くアクセルを踏みこんだ。回転計の針が、一気にレッド・ゾーンに飛びこんだ。

ハンドルに強いぶれが伝わってくる。

「やめて！」

背後で、圭子が叫んだ。

彼はその声を無視した。目に、舗装道路の白線が立ちあがって、一本の細い柱となって迫ってくる。

堀江は、そのとき、なにもみていなかった。なにもきいていなかった。彼はただ、不気味な灰色の車をふり切って走ることだけに賭けていた。

灰色の車は、再び追い越しをかけた。

二つの車は、車体がいすり合うほどに接近した。車体がふれ合って火花が散り、焦げ臭い臭いが漂うかのようにおもえる。

エンジンが吠え猛^{はげ}った。

車体がきしんだ。ハンドルがぶれた。

相手の車との接触を避けようとして、堀江は車をガードレールよりに寄せた。寄せたというよりも、そのようにせざるを得なかったというべきだろう。

今度は、相手の車体とガードレールとの間を、すり抜けるような格好になった。

間隔が、極端にせめられた。

ハンドルを握りながら、堀江は、前方の道幅が、急速にすぼめられていくような錯覚にとらわれた。視野狭窄症にかかったような恐怖を感じた。

無意識のうちに、スピードを落とした。

その間に、灰色の車は、彼の車を追い抜こうとしていた。追い抜かれまいとして、必死にスピードをあげようとするのだが、足は自然にブレーキを踏んでいる。

すると追い抜かれた。

完全に追い抜いたところで、灰色の車は、前面に立ち塞がった。直進すれば、衝突するしかない。

それでも、堀江はなんとか灰色の車の妨害をはねのけようとしていた。社長の娘を、別荘まで無事に送り届けなければならぬという義務感につき動かされていたの

だろう。灰色の車に乗った連中に、社長の娘が拉致されたり、凌辱されたりするようなことになれば、彼自身の将来は完全に、破滅する。

堀江は強引に、対抗車線のほうに出ようとした。

ハンドルを右に切ろうとした。

その瞬間、鈍い衝撃が足もとにきた。

ヘタイヤを撃たれた！

と、堀江は直感した。

前輪のタイヤを射抜かれたのだろう。堀江は前につんのめるような格好になった。

「畜生！」

堀江は、低い呪詛の呻きを發した。

絶望感が、胸を真っ黒に染めた。

ブレーキをかけながら、堀江はあたりを見廻した。別の車に助けをもとめようとしたのだが、闇の漂いはじめたあたりには車の影はなかった。むろん、人影などは見当たらない。

堀江の車は、停車した。

それとほとんど同時に、灰色の車がとまり、なかから二人の男が飛び出して、こちらに走り寄ってきた。

「どうしたの？」

圭子が不安げな声できいた。

「大丈夫です。ご心配なく——」

と堀江は心にあるものとは逆のことをいった。

二人の男が、車に近づいてきた。

いずれも外人だった。

「なにをするんだ！ お前たちは」

堀江は、英語で怒鳴りつけた。外人を相手にした場合、こちらは絶対に弱みをみせてはいけない。少しでも弱みをみせれば、相手はそこにつけこんでくる。三年前まで、ニューヨーク支店駐在の経験をもつ彼は、そのことを知り抜いていた。三星物産東京本社社長秘書室員、堀江茂男、三十一歳。

外人は、二人とも無言だった。

堀江は、二人の顔を交互にみた。

ひとりには、助手席で拳銃を擬していた男だった。痩せて、背が高い。眼窩が、異様にくぼんでいる。薄い、刃物のような唇の持ち主だった。

その男は、窓ごしに拳銃をびたりと、堀江の頭部に向けている。薄い唇の端が、吊りあがっているために、薄

ら笑いを浮かべているようにみえる。実際に、唇には、冷酷で酷薄無残な意志が滲み出ているようだった。そして、唇の端に浮かんだ嘲笑と侮蔑の色。

もうひとりの男は、やや背は低い、がっしりした体つきの男だった。花崗岩を荒くのみで削ったような顔をしている。顔のつくりは大きい、ひしゃげたような小さな目が、妙に薄気味悪い。この男が、運転席でハンドルを握っていたのだろう。二人とも、年齢は三十代半ばだろうか。

がっしりした男も拳銃を握っていて、銃口を後部座席の柳川圭子に向けている。

「降りろ！」

リーダー格らしい長身の男が、堀江にいった。詭りのある英語だった。

「だれだ、お前たちは」

堀江は負けずに怒鳴り返した。

答えずに、男は手で車を降りるよう指示した。

「なにをしようとしているんだ。この車に」

「女に用がある」

「女？」

堀江は、最悪の事態が起こりつつあることを予感した。この二人は、単なるいやがらせや金欲しさのために、尾行してきたのではない。彼は、抗議するようにいった。

「女をどうしようというのだ？」

「いいから、車を降りろ。三秒以内に降りなければ、射殺する」

長身の男の目に、殺意の影が閃いた。

スリー・カウントか、と、堀江は腹のなかで呟いた。

三秒以内に、彼らの命令にしたがわなければ、容赦なく射殺するだろう。

へどうするか」

彼は、バックミラーをちらとみた。

ミラーのなかに、圭子の顔が大写しになった。彼女は、汚れた雪のような顔色をしている。彼女なりに、事態の推移を読み取ったらしく、顔を引きつらせている。ショットのあまり声が出ないのだろう。驕慢で、勝ち気な性格は影をひそめたように、一言も言葉を発しようとしな

い。
堀江にとって、三秒という時間は、ひどく長いようでもある、また極端に短いようにもおもえた。その間に、

かなり多くのことを考えたようにもおもえる。逆に、なにも考えなかったようにも感じられた。

一秒……。

……二秒。

三秒。

三秒目にたどりついた結論は、相手の指示にしたがうということだった。車を降りて、相手の出方を窺うしかない。

彼は車を降りた。

同じ指示が、柳川圭子にも行なわれていたらしい。圭子も車を降りた。

瘦せて、長身の男は、素早く堀江の全身をくまなく検査した。凶器の有無を確認しようとしたのだろう。

堂に入った、敏捷な動作に、堀江は、こいつらは、この手の仕事には手なれているなどおもった。いったい、なにをしようとしているのか。

「女をどうしようというのだ？」

と、堀江は長身の男にいった。

答えずに、長身の男は、もうひとりの男のほうに顎をしやくつてみせた。

うなずいて、がつしりした体つきの男は、圭子を灰色の車のほうに拉致しようとした。彼女の背中には、拳銃がびたりとあてられている。

「なにをするんだ!？」

堀江は反射的に、圭子のあとを追おうとした。

次の瞬間、長身の男は、バックスイングなしの最短距離で、鋭いストレートを打ってきた。

3

堀江の目に、手の拳が接近してくるのがみえた。とっさに彼は右肘で顔をカバーすると、体を沈めた。

そのとき、相手は靴先で彼を蹴りあげた。

靴先は、正確に堀江の顎の先をとらえた。

相手の靴が、鈍い音とともに顎に喰いこんできた。

沈みかけていた彼の体は激しくのけぞった。横転しうになった体を、辛うじてとめ、均衡をとりもどすと、やにわに圭子のほうに走り寄ろうとした。

「余計な手出しはするな」

背後で、男のブローケンな英語が飛んだ。

堀江は、しかし、遮二無二に圭子のところへ走り寄った。相手は、二人とも拳銃をもっているのだ。銃口は、いつ火を噴くかもしれない。

その予感におびえながらも、彼は必死に圭子を、がつしりした体つきの男から引き離そうとしていた。それは、彼女が社長の娘であり、なんとしても彼女が拉致されることだけは防ぎたいという、会社への忠誠心のためなのか、あるいは、彼女が拉致されれば、社員としての自分の一生は破滅に瀕するという危機感のためだったのか、自分でもわからなかった。その二つの感情が複雑に入り混じった、一種の衝動につき動かされて、彼はやみくもに突進した。

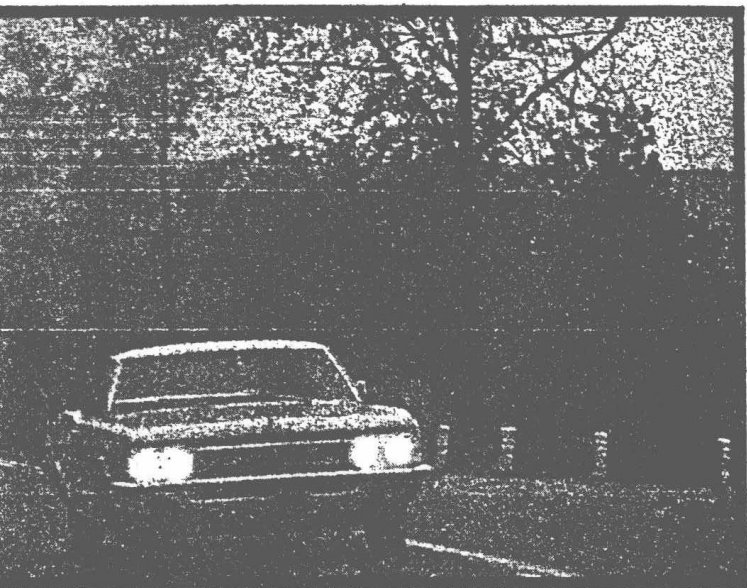
圭子は男の案内で、灰色の車に押しこまれようとしていた。

堀江は、ダイビングするような勢いで、彼女を押しとどめようとした。

「なにをするんだ!」

がつしりした体の男が、彼の腕をつかんで、後ろに引きもどそうとした。

「逃げるんだ!」



堀江は、圭子に叫んだ。そして、男の手をふり切ると、男の前に立ちはだかろうとした。

いつのまにか、長身の男が、すぐ近くにきていた。

長身の男は、堀江を完全に無視していた。素人の抵抗など、彼らにとって、虫が腕にとまったくらいにしか感じられないのだろう。

「男を片づけろ」

長身の男が、背の低いがつしりした男に命じた。

そう命じられて男は、^{なま}廻るように堀江をみた。

社長の娘をかばうようにして、堀江は応戦の構えをとった。

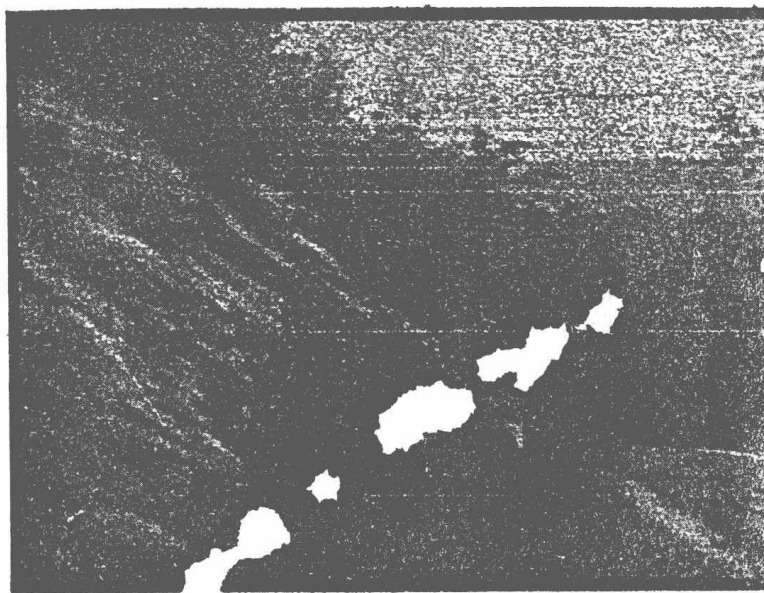
がつしりした男は、堀江との距離を計りながら接近してきた。

「なにをするんだ!」

彼は、唇の端からしたたる血を掌でぬぐいながら、抗議の声をあげた。

「この女は、おれの婚約者だ」^{ファイアンセ}

と、彼はとっさの嘘をついた。そういうことで、こちらの必死の気構えを、少しでも相手に伝えようとしたのだ。



「婚約者？」

男が嘲るように笑った。「たかが、使用人のくせに」

「使用人？」

呻くようにいつて、彼は全身の血が引いていくのを覚えた。こいつらは、彼女の身許を知っているのか。

「早くしろ」

近くに立った長身の男が、しゃがれた声でいった。

がっしりした男の足が、滑るように動いた。堀江の視界に、相手の全身がピントが合ったようにはつきりとみえてきた。

男の眉間には、深い傷跡があった。そのことは、男の凶悪な過去を物語っている。

男は拳銃を左手にもちかえた。

へなぜ拳銃を撃たないのか」

そんな疑念が、つかのま、堀江の頭の隅をかすめた。彼らは、アクセサリーとして拳銃をもち歩いているわけではあるまい。彼らは、おれをなめきっているのだろうか。

そう考えたとき、相手の右手が刺しつらぬくように目の前に迫ってきた。